

日本精神保健看護学会

The Japan Academy of Psychiatric and Mental Health Nursing

ニューズレター 第26号
平成11年9月30日

事務所：〒113-8622
文京区本駒込5-16-9
日本学会事務センター
(理事長 中山洋子)
TEL：03-5814-5810
FAX：03-5814-5825

第9回日本精神保健看護学会 総会・学術集会を終えて

平成11年5月29、30日の両日、第9回学術集会が聖路加看護大学で開催された。

今年の学術集会では、現在の日本の精神医療や看護にとって大きな課題である長期在院患者の問題を取り上げ、「長期在院患者の看護ケアへのチャレンジと資源開発」というメインテーマで行われた。

基調講演では、昨年同様海外から講師を招き、地道な活動の積み重ねから地域医療に移行していったフィンランドの看護ケアについて講演していただいた。マリタ・ヴェリメキさんの講演の中では、今後ますます精神科看護の専門技術が問われていくこと、看護者自身の変化していく必要性があること、病棟のさまざまな看護の試みを評価する評価研究の重要性等について強調された。

シンポジウムでは、3名の精神科看護の実践家と精神科の医師にシンポジストとして発言していただいた。マリタ・ヴェリメキさんには指定発言をお願いし、会場からは東京武蔵野病院の藤村先生をはじめ多くの発言を得た。この中で、長期在院患者が抱えるさまざまな問題、看護者が突き当たる数多くの問題や現状の中で看護は何ができるのかということが討議されたが、同時に長期在院患者のQOLを第一に考えたケアのありかた、そして長期在院患者がおかれている現状の厳しさについても改めて考えさせられるシンポジウムとなった。

ワークショップは、参加者の多様なニーズに応えるため、昨年の6テーマから今年は9テーマに数を増やした。新たに設けられたのは、メインテーマに関するワークショップの他、「リラクゼーションの基礎と呼吸法」、「精神科看護領域における専門看護師の役割と活用」である。ワークショップのテーマについては今回の参加人数やアンケートの結果を踏まえて、来年再度検討していきたいと考えている。

今回は記念すべき第10回の学術集会であり、初めて東京近郊を離れ、福島県で開催することになっている。来年に向け企画委員一同気を引き締めて準備に携わるつもりであるが、初めての地方での学術集会が成功するよう、会員の皆さまにもご協力をお願いしたいと思う。

(第9回学術集会企画委員 安藤 幸子)

ワークショップ主催者・参加者の声

ワークショップ「精神看護学の教育展開」に参加して

沖縄県立浦添看護学校 小松 智

今年度から看護基礎教育2年課程においても、精神看護学が今までの成人看護学の一領域から独立して「学」として構築され展開される。本校においても新カリキュラムをどのように展開するかが大きな課題である。

そこで、本校における精神看護学の授業展開、臨地実習の方法を検討するための資料収集、及び疑問点を明らかにする目的でワークショップへ参加した。

ワークショップにおいては、看護婦養成所系(3年課程)、看護短期大学(3年制)系、看護大学系の3名より精神看護学の教育実践の報告がなされた。そのなかで、神奈川県立平塚看護専門学校(3年課程)では、「精神看護学Ⅰ(精神看護学の概念)」(1単位 15時間)、「精神看護学Ⅱ

（心の健康と精神保健）」（1単位 30時間）、「精神看護学Ⅲ（心の病と健康）」（2単位 45時間）で展開しているとの報告があった。この学校の特徴は、他の大学系の学校が精神保健を多く取り入れたカリキュラムに比べて、従来の精神科看護に重点をおいたカリキュラムであると思われる。このように構築した背景には、新カリキュラムになったと言えども、従来の教育体制を大幅に変更することはなく、従来の教育内容および教授方法を踏襲しながら、今後カリキュラムを運営しながら修正および変更のあり得ることを前提にした構築との印象を受けた。

また他の短大系においては、看護基礎科目に「形態機能学Ⅳ」（精神の諸機能の基本概念を理解する。注意集中、知覚、認知、学習、感情、人格統合の諸機能のメカニズムを通して脳と精神機能のつながり、ひいてはその人らしさを作り出す仕組みとその現れについて理解を深める）を位置づけて、その上に「精神看護論Ⅰ・Ⅱ」「健康生活援助論Ⅱ」、そして、この2科目を学習した上で、「精神看護実習」を構築して運営していると報告していた。

このように各系列において、自分たちの学校の精神看護学の特徴を全面に出し構築しながら、一方、実際の授業の展開においては、精神看護学専任教師の絶対数の不足から、教師の負担が大きく十分な授業が展開できなくて悩んでいるとの報告もなされた。このようにすでに新カリキュラムを運営している学校においても、現状は混沌としており、そのなかで各教師が思考錯誤をしながらカリキュラムを展開しているということが浮き彫りにされた。

一方、新カリキュラムにおいて、臨地実習の展開をどのように行っているかが話題になった。しかしながら、実際にまだ臨地実習を展開していない学校や、やっと1クールが終わったばかりで、まだまだ問題点や良い点が分からず評価できる段階ではないとのことで、資料の提示などは行われなかった。口頭での報告では、3校とも「2単位 90時間、3週間、4-5クール 学生数5-7名」で展開している。実習を担当する精神看護学専任教師は、3名で実際の指導は各病院の実習指導者に委ねられている。そして、1名の専任教師が複数の病棟を受け持ち、実習指導者と協働しながら実習を展開しているとのことであった。学生の実習評価は、学生の提出物、専任教師の実習場面での観察、学生の実習態度、病棟実習指導者のコメントなどを参考にしながら、専任教師が評価する方法をとっているとの報告であった。

大学における臨床教育に関して、中西睦子氏は「現在の臨床現場は、看護職の基本的な使命感や情熱に依存しているだけで十分に看護基礎教育を受けるだけの体制と予算措置がなされていない。実習指導に携わる時間を、大学の非常勤に換算するとゆうに1,000万円を越える。大学サイドの教育理念を実現するためには、常駐指導者の配置が必要」と指摘している（第25回日本医学会総会、看護とチーム医療、大学における看護教育のあり方を探る、週刊医学界新聞、2339号、1999）が、大学における基礎教育のみならず、精神看護学臨地実習においても中西氏が指摘するような現象が起こっていると見なすことができる。

今回のワークショップでの学びと、収集した情報をもとに、本校における精神看護学の教授内容の充実と、来年度から実施される臨地実習の計画に活かしたいと考える。

ワークショップ「リラクゼーションの基礎と呼吸法」を終えて

金沢大学医学部保健学科 五十嵐 透子

本年度の学会において、上記のタイトルで初めてワークショップを開かせていただいた。看護のテキストなどにもリラクゼーションの技法が含まれるようになっていたりしているが、曖昧さと危険性を感じて今回のワークショップを行った。

実施時の留意点や注意事項、そしてどのように個別的な導入をおこなっていくのかに焦点をあて、講義と体験学習形式をとった。ほんのささいなことでも、実際に行ってみると細部にわたる細やかな配慮が必要であることが理解できたように思う。

改めて「リラックスした状態」とはどのような状態であるかを考えてみることから始め、技法に含まれる一つひとつの要素には、それぞれ生理的裏づけがあることを考えていった。予定していた人数よりも多くなったために、参加者全員がデモンストレーションを十分に観察しきれなかったり、時間的制約のために、参加者全員が実際にする側とされる側の体験はできなかったが、率直なフィードバックのやりとりがあったり、参加者一人ひとりの個性や個別的嗜好に気づいたり収穫は多かった印象をもっている。視点を変えた据え方、これは認知的変化を生じることにもなり、日常のコミュニケーション場面で容易に用いることのできる方法であることが学べたと思う。

臨床や教育で、このワークショップで体験されたことが実践されていることを願い、参加者一人ひとりのヘルスプロモーションの一方法として活用されていることを願っている。

ワークショップ「精神科看護事例検討会1

(ADL障害の著しい老年期うつ病)」に参加して

弘前大学医学部付属病院 葛西 強子

うつ病患者への関わりの中での依存と退行の関係は、どこまで依存を引き受けるか、どう離していくか、依存を引き受けるとそれが過度となり際限なくなるのではないかと不安になったり、イライラしたり等のある種の感情が出てくる。看護者から患者に向けて、それに対して患者の方からもその看護婦に向けて、お互い反応しあう転移、逆転移がおきる。転移という現象は日常の社会関係のなかでもよく見られるが、看護婦は自分の逆転移を認識でき、自己洞察することによって患者理解が深まる。さらに患者をひとりの人として見つめることができるように、あらゆる場面で関わって自分の目を変えていく必要がある。以上を今回の事例検討で再認識しました。

<教育活動委員会主催>

第3回ワークショップ「境界例の看護」に参加して

北林病院 宮崎 律子

午前中に行われた、粕田孝行先生の講義は、「境界例人格障害の理解と看護アプローチ」と題して、長谷川病院での実践を通して話をすすめられました。病理としては、心の発達課題において、分離・固体化の課題を解決できず、母親からの十分な安心・安全感の保証が得られないことにより、自己評価の低下となり、他者からの見捨てられ感などを持つことが特徴としてあげられました。思春期以降に病理が表面化してくるとされ、自我境界の脆弱化により<分裂><行動化><対人操作>などのパターン化された言動が多くの患者さんに見られ、その中で家族療法の必要性が叫ばれている点が、よく分かりました。

病棟で見られる顕著な特徴を具体例を示しながらの内容でとても分かりやすいものでした。看護アプローチの中では、アプローチの前提として、信頼・安全・コントロールを援助の目的にあげ、アプローチの姿勢を細かく話して下さいました。今まで境界例に対しては苦手意識が先に立って、さけない気持ちが優先していましたが、境界例の人たちから逃げずに関わっていこうと思えるようになりました。

午後からのグループワークについては、事例紹介で聞けなかった点についての質疑応答に時間をとられたためか、患者さんの育ってきた家庭環境や背景を看護者サイドで客観的に論じるだけでなく、問題をかかえている患者さんに対して、私達がどのように関わりながら援助をすすめていくことができるのかという視点での話し合いなどができずに残念でした。また、「そんな家庭環境では救われな、駄目だな」という一部の意見などが少し気になりましたが、グループでの話し合いの中で、いろいろな意見を聞きながら、自分の考えを整理していくことができよかったですと思います。欲をいえば、もう少し若い人の参加と意見が聞けるとよかったですと思います。

病気と闘っている主役は患者さんであることを忘れずに、自分自身への自己洞察を深めながら、患者さんや家族と共に成長していくことのできるよきパートナーとして、看護に取り組んでいきたいと思えます。

教育活動委員会主催：第4回ワークショップのお知らせ

教育活動委員会主催第4回ワークショップを下記の要領で開催致します。皆様どうぞふるってご参加ください。

日時：平成11年10月9日(土) 9:00-16:00

場所：信州大学医療技術短期大学部(長野県松本市旭3-1-1)

テーマ：「精神科救急看護に関すること(仮)」

参加費：3,000円(会員・非会員を問わず)

お問い合わせ・お申し込み：

北里大学看護学部(228-0829 相模原市北里2-1-1)

精神看護研究室内 日本精神保健看護学会教育活動委員会(担当：小林)

fax: 042-778-9824

E-mail: nkoba@nrs.kitasato-u.ac.jp

第10回日本精神保健看護学会総会・学術集会のお知らせ

記念すべき第10回日本精神保健看護学会総会・学術集会は、下記のように開催される予定です。期日・場所の正式な決定は、12月発行の次号ニュースレター(27号)でお知らせ致します。

とき(予定)：平成12年6月3日(土)、4日(日)

ところ(予定)：福島県立医科大学

《一般演題募集について》

本学会では会員相互の意見・情報の交換、交流を重視し、参加型の学会として、十分なディスカッションの場を設けております。萌芽的研究、実践報告など、研究として発展段階にある演題も大いに歓迎しております。

会員の皆様の日頃の研究・実践の成果を発表する場として、どうぞふるってお申し込みください。

1. 発表ご希望の方は、次号(第27号)ニュースレターに同封のハガキにて、演題名をお申し込みください。

2. 演題を登録された方には、のちほど抄録用原稿用紙をお送り致します。

編集委員会からのお知らせ

日本精神保健看護学会誌第9巻への投稿〆切は、平成11年10月15日(消印有効)です。たくさんのご投稿をお待ちしております。

投稿先：〒162-8666 東京都新宿区河田町8-1 東京女子医科大学看護学部内

日本精神保健看護学会編集委員会

*書留郵送でお願い致します。

なお、原稿には必ず、著者全員の会員番号をお書き添えください。

《ニュースレターへの投稿募集について》

日本精神保健看護学会ニュースレターでは、会員の皆様からの投稿記事を歓迎致します。研究会の案内、海外見聞記、日頃の実践・教育の報告など、ふるってご投稿ください。記事は、おおよそ400字程度にまとめ、原稿にワープロ機種名・ソフト名を記載したフロッピー・ディスクを添えて、上記日本精神保健看護学会・編集委員会宛郵送してください。ニュースレターの各発行月(9月、12月、4月)の一月前までにお送り下さい。

会員の皆様へ一変更届け提出のお願い

日本精神保健看護学会では、本年度の事業の一環と致しまして、学会員名簿を作成致します。学会登録事項に変更がある方は、同封の用紙に記入し、学会事務所までFAXにて、お知らせくださいませようお願い致します。

<学会へのお問い合わせについて>

入会手続き・学会誌のバックナンバーのお求め等、学会に関するお問い合わせは、下記宛てお願い致します。

日本精神保健看護学会事務所：〒113-8622 文京区本駒込5-16-9

財団法人 日本学会事務センター

TEL 03-5814-5810

FAX 03-5814-5825

お詫びと訂正
* 本年5月に発行致しました日本精神保健看護学会誌第8巻のp.21に一部誤植がありました。*
* 深くお詫び申し上げます。本ニュースレターに「正誤表」を同封致しますので、訂正をお願い*
* 致します。*

* 編集委員会 *

(編集委員：田中美恵子、岩瀬信夫、中山洋子、若狭紅子、菅原とよ子、川添由紀、青本さとみ)